

**養育者のアレキシサイミア傾向および共感性と
幼児期の子どもが表出するネガティブ感情への対処の関連について**
桐 谷 早 紀

感情制御の発達過程にある幼時期の子どもは、自らの感情を制御できない状況になることが多く、養育者からの感情制御によって適応的な状態に制御されている。子どもがネガティブな感情を表出したときに、子どもの感情をなだめたり、問題の解決に向かうよう手助けしたりする反応性を示す養育者の子どもは、内在化問題が少なく、ネガティブ感情への対処能力が高い。その一方で、子どもの感情をコントロールするために罰したり、子どもの感情を軽視したりする反応性を示す養育者の子どもは内在化および外在化問題が多いことが明らかにされている。養育者が示す反応性が子どもに及ぼす影響は多く検討されてきている一方、養育者が示す反応性に影響する養育者自身の背景要因に注目した研究はあまり見受けられない。そこで本研究では、幼児期の子どもが泣いたり怒ったりとネガティブ感情を表出した際に、養育者が示す反応性に影響を及ぼす要因として、アレキシサイミア傾向と共感性を取り上げ検討した。

分析の結果、アレキシサイミア傾向と養育者の反応性の関連については、養育者自身が自他の感情よりも外的な事実のみに関心を向ける傾向が高いと、子どもがネガティブ感情を表出した際に養育者自身が刺激されたり、苦しめられたりする不快反応が高いということが示された。養育者自身が子どもの表出する感情に対して不快に感じているか否かということは、客観的に判断するのは困難であるため、保育士や幼稚園教諭など養育者と関わる機会のある者は、養育者と積極的にコミュニケーションを取る姿勢が重要だと考えられた。

また、共感性と養育者の反応性の関連については、他者の視点に立ちその他者の気持ちを考える傾向が高いと、子どものネガティブな感情自体を調整しようとする反応や、子どもの苦痛や苦痛を引き起こす問題の解決に向けて手助けをする反応が高いことが示された。子どものネガティブな感情自体を調整する反応にはさらに、他者に自分を置きかえるよう想像する力も関連を示すことが明らかにされた。そして、他者の苦痛の観察により自己に生起される不安や恐怖にとらわれてしまう程度が高いと、子どものネガティブ感情の表出をコントロールするために、条件を与えることで抑えたり、子どもの不注意を責めるなどして言語的に罰する反応を示すことが示唆された。養育者のアレキシサイミア傾向と共感性の交互作用が、子どものネガティブ感情への反応性に及ぼす影響は示されなかった。今後は、場面状況や養育者がその場面で何を意図してそのような反応性を示したのかということを考慮した上での検討が求められる。